

2013 年度 立命館学校教育研究会 秋季大会

2013 年度 立命館学校教育研究会 秋季大会のご報告



2013 年 12 月 1 日（日）午後 2 時より午後 4 時まで、2013 年度秋季大会が開催された。今年度は、これまでより 1 つ多い 4 つの分科会に、120 名を超える参加があり、各分科会とも講師のお話をもとに熱心に討論がおこなわれた（報告は別項）。

当日は、午後 4 時 10 分より午後 5 時まで、今年度実施された教員採用試験に合格し、春から教壇に立つ学生たちを励ます「2014 年度採用 教員採用試験合格者激励会」が立命館大学教職教育推進機構と、立命館学校教育研究会との共催で開催された。

2013 年 12 月 1 日現在で、合格が判明している現役 103 名・既卒 161 名、合計 264 名のうち 62 名の参加者を多くの校友教職員が激励した。

引き続き開催された懇親会には、4 月より当研究会への入会を予定している採用試験合格者と、会員、現役学生等 100 名ほどが一同に会し、会員相互の情報交換や新たに教壇に立つ学生への励まし、またこれから教師を目指す学生たちとの交流など、有意義なひと時を持つことができた。岡本学校教育研究会副会長の閉会挨拶と一本締めの後、名残を惜しむ参加者の皆さんがおられた。

第 1 分科会 「教員研修の立場から見た教員養成の諸課題」

講師 三善 公文（神戸市立福池小学校長）

コーディネーター 岡本 真一（神戸市立科学技術高等学校教頭）

第 1 分科会には、約 20 名の参加者があった。

講師は、神戸市教育センターにおいて若手の育成に関する研究に従事し、現在小学校長として学校で若手教員の育成にあたっている。講師は、若手の育成に取り組まれた経験をもとに話題提供をされた。講演の要旨は以下のとおり。

特に政令市の課題とされている多忙化、小規模化、若年化の進行は神戸においても顕著で、1 年目および臨時教員の比率が高い。この状況下、研修の実効性を高める方策を検討した。職員体育が盛んな点や人

事に於ける「神戸方式」等から醸成された土壌の上で臨時教員も含めた研修制度を実施している。

そのため、対象者の希望を調べると「板書」「個の指導」が多く、実際役に立つものに対する希望が強かった。これらの希望に応え、「受講者も講師も伸びる研修」を企画し実施している。また、受講者の状態に鑑み、曜日により内容を考えること、学校でも研修を実施できるサンプルを示すことに留意した。

若手教員の研修形態として聴講形式よりも小グループでの話し合いを重視している。同期生の話のほう
がより響くことがその理由である。若手教員の成長のきっかけは、(1)憧れの先輩との出会い(2)同期の教員
からの刺激(3)挫折感を味わったとき、である。これらを実感できる研修を実施し、「出向く研修」から
「招く研修」や「自主的な研修」ができるようにしたい。

神戸市では、初任者育成3年プランを実施し、委嘱した校長退職者が学校を訪問して研修会を行う「ス
ーパーアドバイザー派遣事業」を行っている。この3年プランで重視しているポイントは、教員の同僚性
とメンタルヘルスである。また、校長退職者からは教員としての佇まいも感じ取ってもらえていることも
成果である。

この研修には、学校での事前検討会が行われるが、その質及び参加率の向上が課題である。

若手育成のキーワード、その第一は「カーリング」である。要はブラシで誘導してもストーンは自分で
進んでいると「思っている」ことである。自ら考え行動していると思われる研修が実効性を持つのであ
る。

これらのお話をもとに参加者からは、①学校の条件整備に関すること、②合格者の決意表明と激励、③
ハウツー的研修の是非、④大学における授業改善、⑤スーパーアドバイザーの制度と活用方策、⑥学び続
けるための必要なことから などについて発言や質疑があり、充実したひと時を送ることができた。

(文責 運営委員 大島 明)

第2分科会 「インドから学ぶ家庭教育・学校教育」

講師 MR.DHARMENDRA KUMAR YADAV 氏

司会 山本宏之(特定非営利活動法人 日印教育支援センター理事長)

第2分科会には40名を越える参加者があった。

司会者より講師の紹介の後、「インドから学ぶ家庭教育・学校教育」というテーマで報告を行った。「イ
ンドで最も尊敬されるものは？」＝「先生・親・神様」という問いかけに始まり、インドの歴史、社会、
文化に触れながら、教育問題における"エリート養成の学校と貧困地域の学校の各々の光と陰"についての
現状報告と問題点が指摘された。エリート養成学校では、裕福な家庭のこどもたちが世界をリードする教
育を受けつつも、精神的なもろさやいじめ・不登校・うつといった現在の日本教育にも相通ずる側面があ
ること、貧困地域では、家庭が主たる教育の場であるが、環境における教育への無関心から、学校へ通え
ない層も多い一方、講師の開校している無料学校などで、教育の機会が与えられれば、こどもたちの燃え

るような情熱、目的を持って生き生きとした学校生活（そこではいじめや不登校などがまったくない）を送っていることが報告された。

"教育は何のためにするのか?"では、子供たちに自信を与え、努力することの大切さを教える中で、将来の夢に向かって仕事を選択できることが可能になることを強調された。

また、テキストのみの勉強ではなく、さまざまな体験を積み重ねることが、「新しい発見」、「能力の開発」につながり、そのことが、地域や国、世界を変える力にもなることも述べられた。

"インドと日本の教育環境の比較"については、日本はさまざまなものを与えすぎているのではないかと感じている。必要最小限の教育環境整備にとどめることによって自らが学び、考え、体験するなかで自立・学力向上につながるのではないかと指摘があった。

計算において優れた機能を持つソロバンは、講師自身も日本に来てはじめてその存在を知り、兵庫県小野市から700丁の提供を受け、インドの学校に広めており数学能力向上にとって欠かせない教材ともなっている。と、インドにおけるソロバンの普及活動についての紹介があった。

これを受けた質疑応答では、「日本の子供たちに夢を持たせるために家庭や学校で何をすべきか。」「生まれ育った環境になかでなぜ日本語、英語を学ぼうとしたのか。そのなかで何を感じたのか。」「与えすぎの環境にならないような具体的な改善策をどのように考えるか」「挫折しそうなときに強さを保つための考え方」「ポジティブシンキングのためにベースとなる家庭教育・学校教育のあり方」「教育を受ける中で夢を持ってよい仕事を目指すことだけでは、コミュニティの発展や社会の差別構造の解消にはつながらないと思うがそれをどのように考えるか」「学校のなかで暴れる子、やんちゃな子がいた場合の対応策について」など多くの質疑がなされ、講師は、一つ一つの質問に対して丁寧に回答され、非常に有意義な分科会となった。

最後に、立命館大学経営学部4回生の河野くん（珠算部主将）からも、英語もヒンドゥー語もできなかったが、インドで数日間ソロバンを教えた経験とともに、学校現場や家庭環境を自らの目で確認することをはじめさまざまな体験をすることが大切であることを語った。

(文責 事務局)

第3分科会 「ICT教育の可能性と課題」

講師 平岡 伸之（京都教育大学附属桃山小学校教諭）

司会 甲斐 謙介（向日市立第4向陽小学校指導教諭）

第3分科会には、約30名の参加があった。

講師の平岡教諭は、京都府内の公立小学校に長年勤務された後に、現任校へ赴任されておられます。ご自身のことを「アナログ人間」として自己紹介され、公立校での勤務においても、ご自身の意識の面で

も、ITCの活用とは距離のある経験を持ちであるにも関わらず、現在では、ICT教育を推進する京都教育大学附属桃山小学校の研究主任をお務めであるという、ギャップを感じる部分から始まったお話。ICT教育には、若干の苦手意識を持っているであろう、多くの参加者の興味や関心をさらに引く導入となりました。

研究指定を受けて、ICT活用を推進している附属桃山小学校での実践や研究成果に基づくお話であり、大変興味深く、今後の学校教育のあり方を考えるための重要な課題を提起いただきました。附属桃山小学校で現在取り組んでいる新教科である「メディアコミュニケーション科」の概要や実践内容のご報告では、ICT教育の最先端の事例が分かりました。また、講師の平岡先生が実践された社会科の授業のお話も、具体的な教科指導の場面で、ICTを活用することによって、授業の姿や生徒の認識がどのように変わるのかがよく理解できました。教師がツールとして活用するのみならず、児童にとっても、ノートと鉛筆と紙ファイルという世界が大きく変わる点も興味深い点でした、さらに、ICTの活用といえば、授業内での活用を思い浮かべる人も多い中で、校内のLAN環境の整備によって、ペーパーレス化は進むことであったり、公務が電子化されることによる負担軽減になるという点についてもお話いただき、学校教育全般におけるICTの可能性が理解できました。

ご報告は、授業場面を具体的に提示いただいたり、配付資料としても、研究紀要からの抜き出し、平岡先生の作成された複数の学習指導案など、充実した資料を用意いただき、参加者の理解をより深めることができました。

質疑においては、タブレットをノート代わりにすれば、子どもの間違えた部分も消えてしまうことをどう考えればよいのか、子どもの思考との関係で、ノートの活用とどう併用すればよいのか、情報リテラシーやセキュリティの問題、ICTを使ってどう職員会議が行われるのかなど、様々な点についてのやり取りがなされました。とくに、従来の学習とICTを活用した学習とでは、子どもの思考や成長がどう変化するかという本質的な問題についても議論できたのは、非常に有意義であったといえます。また、本会会員の現職の先生はもとより、学部生や大学院生からも多く質問が出されたこともあって、非常に、白熱した質疑の時間となりました。

附属桃山小学校が研究指定校として取り組んだ成果の研究紀要が保存された、CDも、多くの参加者に配布いただきまして、興味深い内容のお話、充実した配付資料、白熱した議論など、様々な面において、参加者も十分に満足のいく分科会となりました。

(文責 運営委員 森田 真樹)

第4分科会 「自己制御機能の発達と支援について」

講師 長山 秀子 (平安女学院中学・高等学校スクールカウンセラー)

司会 市木 敦之 (学校教育研究会事務局長)

第四分科会では「自己制御機能の発達と支援について」と題して、平安女学院中学校・高等学校スクールカウンセラー、相楽ネットワーク株式会社代表取締役の長山秀子先生にご講演いただきました。約 30 名の参会者が長山先生のお話に熱心に耳を傾け、ワークショップに参加しました。

講演では、いじめや学級崩壊、不登校などの問題の背景には、自己制御機能の発達の問題が関与していると指摘されました。自己制御機能（self-regulation）は、自己抑制と自己主張の2つの側面からなるものであり、この2つが個人のなかで両立しながらバランスよく発達することが重要であるが、現在、2側面のアンバランスさを抱えて苦しんでいる生徒が多い。この自己制御機能の発達に親の養育態度が大きく影響を与えること、つまり親の介入や過保護が自己抑制と自己主張にマイナスの影響を与えるとお話になりました。そのうえで、Baumrindの親の養育態度の3分類（権威的、権威主義的、許容的）をもとに、権威的な養育態度（許容と統制のバランス）が幼児期から青年期にとって重要であるとお話になりました。そして、実際の事例をもとにして、教師としてどのように保護者に対応することが生徒の自己制御機能の発達を支援できるかを参加者とともに考えました。さらに、保護者の話を聴くためのS.C.O.R.E（S-現状、C-要因、O-望ましい成果あるいは状態、R-リソース、E-結果）スコアモデルを用いたカウンセリングメソッドをワークショップによって学びました。また、クライテリア（規範。尺度。判定基準）を探る技法についても言及され、価値観や信念のようなものが見えてくることが重要であり、それをリソースとして意識したときに変化していくきっかけがあると述べられました。

参加者は、事例を用いた話し合いやワークショップに熱心に参加して、時間が経つのを忘れるほど充実した時間を過ごすことができました。

（文責：運営委員 井上雅彦）